

# J.S.バッハの「小フーガ ト短調 BWV578」

— ピアノ独奏のための編曲 —

島 畑 齊\*

Hitoshi SHIMAHATA

Fugue in G Minor BWV578 by J.S.Bach  
— A Transcription for Piano Solo —

[キーワード：J.S.バッハ、フーガ、ピアノ独奏、編曲]

## 1. はじめに

本稿で取り上げるJ.S.バッハの「小フーガト短調」は、中学校の鑑賞共通教材に含まれている曲である。鑑賞の指導におけるねらいは、いろいろな音楽を聴くことによって、音楽の美しさや価値を感じ取ることができる能力を養い、それとともに生徒自らが進んで音楽を味わおうとする意欲を起こさせ、音楽に対する感性と音楽を愛好する心情を育てることにあるが、ともすれば、授業における鑑賞は、歌唱や器楽のような自己から積極的に表現する活動と比較して、音楽の美しさを感じ取るだけという受動的または消極的な行為としてとらえられがちになる。確かに、音楽を聴いて曲の雰囲気を感じ、その曲想を抱くことは重要な一面であるが、しかし他方の鑑賞における要素、つまり曲の構成や様式については、レコードやCDを聴くだけで理解するのは容易なことではない。なぜならば訓練や経験を積んだ専門家であっても、初めての曲を2、3度聴いただけではその全容を理解するのは難しいからである。そこで生徒が理解しやすくするためには、主題や構造、作曲技法を説明するなどの教師側からはたらきかけが大切となる。その際に曲の全体や一部を実際に演奏して聴かせることは有効な指導のひとつであり、フーガのようなポリフォニー音楽を理解するうえでこれは必要不可欠であると考えられる。しかし現実には、パイプオルガンはごく一部のホールや教会にしか設置されておらず、仮にそのような場所を利用できる機会があったとしても、おそらくパイプオルガンを正しく演奏できる教師は極々僅かであろう。各学校に設置されていて、しかも同じ鍵盤楽器に属するピアノを利用

するのが実用的かつ有効な方法ではないだろうか。

ところで、一般的にピアノは音楽という広い意味では器楽に含まれるが、中学校の音楽教育における器楽はリコーダーやギターのリズムや合奏が中心となっている。ピアノは歌唱やほかの器楽の伴奏のための伴奏楽器として利用される面が多い。ピアノは本来は独奏楽器であるが、そのほかに伴奏楽器ともなり、また他方ではいろいろなかたちで使われる。つまり重奏、合奏、それに管弦楽など他の演奏形態を代用するための楽器としてである。学校教育では、この代用楽器という面をもっと積極的に生かすことはできないであろうか。いろいろな作品をピアノ用に編曲して弾くことによって、音楽をより身近なものとしてとらえることができるであろう。

そこで、本稿ではこのような観点から、J.S.バッハのオルガン曲「小フーガト短調」のピアノ編曲を考察した。

## 2. ピアノ編曲の実例

J.S.バッハの作品をピアノのために編曲する試みは、現在に至るまでしばしば行われてきた。たとえば、リスト (Franz Liszt, 1811-1886) による数曲の「前奏曲とフーガ」やブゾーニ (Ferruccio Benvenuto Busoni, 1866-1924) による「シャコンヌ」をはじめ、いろいろな作曲家やピアニストが数多くの編曲を手がけてきた。「小フーガト短調」についても、わが国ではピアニストでもあり作曲家の高橋悠治氏 (1938-現在) による楽譜が出版されている。オルガン作品をピアノ用に編曲する場合、リストなども行ったように、オルガンのもつ深々とした響きを模倣する方法として、ペダル声部

\* 島根大学教育学部音楽研究室

のバス音にオクターブの音を重ねる手法が用いられてきた。高橋氏による編曲は、これ以外にも主題や各部の旋律にオクターブ重複を用いたり、原曲にはなかった声部や音を新たに補うなどの独自の工夫もみられる。では高橋版を例に取りあげて、それらの手法を取り入れた箇所を指摘する。

### 音の追加

高音部においては、次の音を加えてオクターブ重複のかたちとしている。

- ・第9小節目の16分音符f<sup>1</sup>、g<sup>1</sup>、a<sup>1</sup>、g<sup>1</sup>音
- ・第15小節目の第3拍目から第16小節目の第2拍目までの4分音符b、c<sup>1</sup>、d<sup>1</sup>、c<sup>1</sup>音
- ・第21小節目後半の16分音符g<sup>1</sup>-a<sup>1</sup>-b<sup>1</sup>音
- ・第52小節目の第3拍目から第54小節目の第2拍目までのc<sup>1</sup>-d<sup>1</sup>-es<sup>1</sup>-d<sup>1</sup>-d<sup>1</sup>-c<sup>1</sup>-d<sup>1</sup>-es<sup>1</sup>-d<sup>1</sup>音
- ・第55小節目の第2拍目から同第3拍目までの16分音符b<sup>2</sup>-a<sup>2</sup>音
- ・第55小節目の第4拍目から第56小節目の第1拍目までの16分音符es<sup>2</sup>-d<sup>2</sup>音
- ・第56小節目の第2拍目から同第3拍目までの16分音符a<sup>2</sup>-g<sup>2</sup>音
- ・第56小節目の第4拍目から第57小節目の第1拍目までの16分音符d<sup>2</sup>-c<sup>2</sup>音
- ・第57小節目の第2拍目から同第3拍目までの16分音符g<sup>2</sup>-fis<sup>2</sup>音

また、低音部におけるオクターブ重複のかたちは次の箇所の音によって行われている。ここでは、原曲においてペダル鍵盤で弾くようにされた箇所以外について目を向けてみる。

- ・第12小節目の第3拍目から第16小節目の第2拍目までの主題G-d-B-A-G-B-A-B-Fis-A-D-G-A-B-A-G-A-B-A音と、この主題の延長線上にある第17小節目の第1拍目のG音
- ・第23小節目の第1拍目の16分音符C音
- ・第24小節目の第2拍目の16分音符es音、同第4拍目のd音
- ・第25小節目から第26小節目・第1拍目までのG-d-B-A音
- ・第55小節目の第3拍目の4分音符F音
- ・第61小節目のd-e-fis-g音

さらに、次にあげた音は編曲者によって全く新しく付け加られたものである。これらは、原曲の旋律に3度音程の音や和声音を補って、充実した響きを得るための方法となっている。

- ・第10小節目の第1拍目から同第3拍目までの8分音

符a<sup>2</sup>-g<sup>2</sup>-f<sup>2</sup>音（譜例1）

- ・第16小節目から第19小節目の第1拍目までに加えられたd<sup>2</sup>-c<sup>2</sup>-b<sup>1</sup>音とa<sup>1</sup>-g<sup>1</sup>-a<sup>1</sup>-cis<sup>2</sup>-e<sup>1</sup>音（譜例2）
- ・第46小節目の第3拍目の8分音符c<sup>2</sup>音、第47小節目の第3拍目の8分音符b<sup>1</sup>音、第48小節目の第4拍目の4分音符d音（譜例3）
- ・第54小節目の第3拍目から第55小節目の第1拍目までの8分音符c<sup>2</sup>-as<sup>1</sup>-g<sup>1</sup>と4分音符g<sup>1</sup>音（譜例4）
- ・第64小節目の第2拍目の8分音符b<sup>1</sup>音（譜例5）

以上のほかに、第8小節目では原曲では書かれていなかったa<sup>1</sup>音の反復がシンコペーションのかたちで示されている（譜例1）。またこれと類似したかたちには、第28小節目から第30小節目までの上声のd<sup>2</sup>音がある。

### 音自身の変更

第38小節目の第4拍目において、原曲ではb<sup>1</sup>-a<sup>1</sup>-g<sup>1</sup>-b<sup>1</sup>音で書かれていた4つの16分音符が編曲者によってb<sup>1</sup>-d<sup>2</sup>-c<sup>2</sup>-b<sup>1</sup>音へと書き換えられている（譜例6）。

### 音の省略

原曲に書かれていた次の音が省略されている。

- ・第18小節目の第1拍目d<sup>1</sup>音
- ・第33小節目の第1拍目、バスのB音
- ・第52小節目から第54小節目までのg音
- ・第64小節目の第4拍目a<sup>1</sup>音

### 音の移動

次の音は原曲では1オクターブ下に書かれていたものである。

- ・第19小節目の第2拍目g<sup>2</sup>-f<sup>2</sup>-e<sup>2</sup>音、およびこれに続く第22小節目までのfis<sup>2</sup>-cis<sup>2</sup>-dis<sup>2</sup>-cis<sup>2</sup>-……音
- ・第26小節目の後半、16分音符d<sup>1</sup>-e<sup>1</sup>-fis<sup>1</sup>-g<sup>1</sup>-d<sup>1</sup>音
- ・第32小節目の内声部、e<sup>1</sup>-f<sup>1</sup>音とa<sup>1</sup>音
- ・第45小節目のes<sup>2</sup>-d<sup>2</sup>音
- ・第47小節目の第1拍目a<sup>1</sup>音
- ・第48小節目の第1拍目g<sup>1</sup>音
- ・第49小節目の第1拍目c<sup>2</sup>音
- ・第50小節目の第3拍目g音
- ・第51小節目の第1拍目c<sup>2</sup>-g<sup>1</sup>音
- ・第64小節目の第3拍目g<sup>2</sup>音と第4拍目d<sup>2</sup>音
- ・第65小節目の第1拍目d<sup>2</sup>音

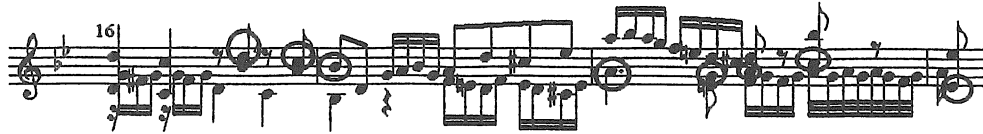
### 長い拍にわたる音符の取り扱い

第19小節目・第3拍目から第21小節目にかけての上声部a<sup>2</sup>音は、原曲ではトリラーが付けられた8拍余りの

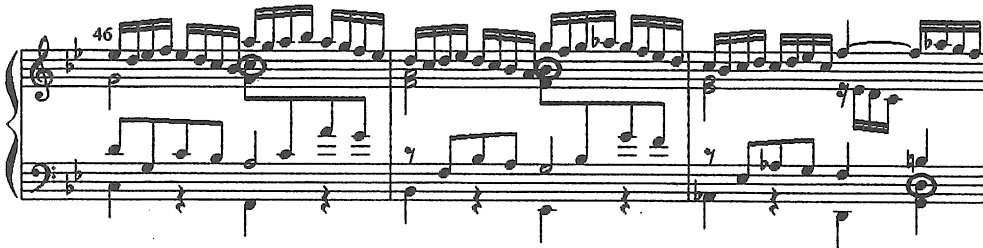
譜例 1



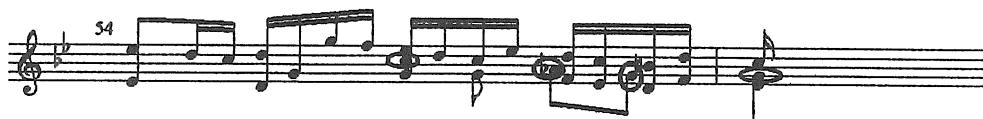
譜例 2



譜例 3



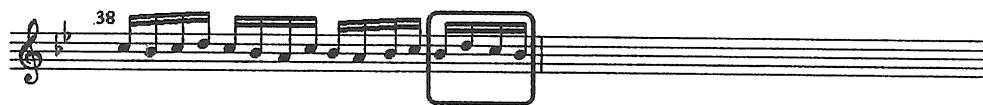
譜例 4



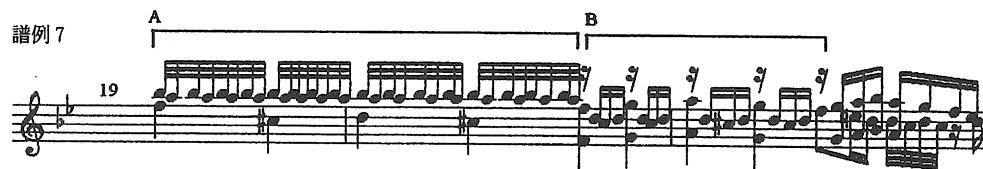
譜例 5



譜例 6



譜例 7



上記の譜例は高橋悠治編曲より抜粋

音であり、このトリラーは通常 $b^2-a^2-b^2-a^2-b^2-a^2\cdots$ 音で弾く。またこのトリラーと同時に、内声部には16分音符の $f^1-a^1-g^1-a^1-cis^1-a^1-g^1-a^1\cdots$ 音が置かれ、両声部は最大で1オクターブと6度の音程になる。右手だけでこの両声部を弾くことは不可能であり、内声部を1オクターブ上げたとしても、トリラーを弾きながら16分音符を弾くのは極めて困難な箇所である。そこで高橋版では、前半の4拍（譜例7のA）は上声部のトリラーを弾くことにして（この結果内声部を簡略化）、後半（譜例7のB）は上声部のトリラーをやめる代わりに内声部のモチーフを弾くことにした。このような箇所は、調性は異なるが第43小節目から第45小節目にもみられる。

次に、第35小節目から第37小節目までの内声部の $f^1$ 音について。この $f^1$ 音は原曲では10拍の長さの音であり、おそらくピアノで10拍分押さえ続けても音が聴こえなくなるという理由からと思われるが、最初の8拍では全音符が4分音符に書き直されている。また同様に、第65小節目から第67小節目の2分音符と全音符の $d^1$ 音も8分音符に書き直された。

以上、高橋版の編曲で考慮された点のみをみてきたが、ここでは数々の工夫がなされていた。まとめると、1オクターブを重ねる方法は旋律線の強調を目的とし、低音部についてはオルガンの重厚な響きの模倣をねらっていると思われる。また、原曲の旋律に3度や6度音程の音を補う方法は、旋律のおよび和声的な面で豊かな響きを得るための方法である。オクターブ移動については、オルガンの楽譜をそのままピアノで弾いても指が届かない音があるので、掴める範囲に移動させる措置であり、長い拍にわたる音符については前述の通りである。なかでも、音を補う方法は編曲者独自の発想で行われており、これによってこの編曲は原曲のかたちを生かしながらもピアノでの演奏効果に配慮した内容となっている。

### 3. フーガ ト短調 BWV578 のピアノ編曲

ここでは筆者が編曲を行う際に考慮した点をあげ、その楽譜を本稿末に提示する。編曲する際の方針は次のような点を基本とした。

原曲に書かれている音を最大限に尊重して、音の追加や改変は原則的に行わない。ピアノで弾く場合に演奏効果がある程度低減するのは否めないが、できるだけ簡潔な姿で提示する方が生徒に構造を理解させやすいと考えたからである。しかしそうはいっても、一部については楽器の違いや音楽的な理由から、原曲のかたちを歪めない

い範囲で音の変更を行わなければならない。共に鍵盤楽器に属するピアノとパイプオルガンではあるが、この両者は発音メカニズムが全く異なる。オルガンには通常手で操作する2段以上のマニュアル鍵盤と、足で操作するペダル鍵盤があり、これに加えてストップ（音色を変化させる装置）やカプラー（鍵盤と鍵盤を連動させる装置）も利用することができる。つまり、低音から高音までの幅広い音域を手と足で扱えるうに、倍音やオクターブなどの音も組み合わせる発音できるのである。

一方、ピアノには1列の鍵盤しかなく、これを2本の手だけで弾く。ペダルを用いることによって、ある程度の表現力を増すことも可能ではあるが、基本的に音色や強弱の変化は指のタッチによってなされる仕組みとなっている。したがって、オルガン作品に現れる幅広い音程の音をピアノで弾こうとしても、指が届かなかったり、あるいは技術的に難しくて実用的な演奏とはならない場合が生じるので、ピアノでの演奏表現のためにはいくつかの妥協ともいべき解決策が必要となってくる。つまり具体的には、音程が広く打鍵不可能な音に対しては指が届く範囲に移動したり省略を行い、オルガンのペダル声部の音についてはその重厚で深々とした響きを模倣するためにオクターブ重複を取り入れるなどである。

次に、長い拍にわたる音符に付けられたトリラーとタイを取り外すこととした。なぜならばこの曲の場合には、原曲通りにピアノで8拍や10拍もの長さのトリラーを弾こうとすると、他の声部のモチーフを簡略化したり省略しなければならないからである。前項でも指摘したように高橋版でもこの対策として、長い拍の音符の前半は上声のトリラーを弾き（この結果内声部は簡略化された）、後半は上声のトリラーをやめて内声部を弾くような方法がとられた。しかし、本稿では各声部のモチーフを明確にすることに重点を置いているため、あえてトリラーを外すことにしたのである。またタイについては、ピアノで8拍や10拍もの長さを押さえ続けたとしても次第に聴こえなくなるので、この解決策としてタイを取り外し、タイが示されていた音符そのものを弾くことにした。

では、具体的に検討した箇所を取りあげてみる。

#### 音の追加

原曲においてペダル鍵盤で弾くように書かれた箇所（第17小節目から第22小節目、第26小節目から第32小節目、第41小節目から第55小節目、第63小節目から第68小節目）は、基本的にはバス音をオクターブで重複したかたちで弾くようにした。ただし、第46小節目から第50小節目のバスはオクターブ重複を用いたかったが、上声部

との関係上きわめて演奏が困難になるので取りやめた。  
また、第52小節目から第54小節目のバスの16分音符についても、響きが濁りやすくなるので取りやめた。

このほかにオクターブ重複とした音は、第45小節目・第2拍目から3拍目の右手 $a^1-b^1$ 音と第52小節目・第3拍目から第54小節目の右手 $c^1-d^1-es^1-d^1-c^1-d^1-es^1-d^1-g^1-f^1$ 音である。

また補助的な意味で、和音の響きを充実するために追加した音は、第64小節目・第3拍目の右手 $d^2$ 音、および最終小節の終止和音である。

### 音の省略

原曲の第18小節目・第4拍目の内声部 $g^1$ 音に付けられているトリラーは本来は2度上の $a^1$ 音から弾き始める奏法になるが、ピアノでこのように弾いた場合、この $a^1$ 音と同時に上声部 $b^2$ 音を片手で掴まなければならず(音程は短9度)、小さな手には難しくなる。そこで本稿の編曲では、最初の $a^1$ 音を弾くことをやめて32分休符を置き、バッハの時代の基本的な奏法ではないが、トリラーを主音符 $g^1$ 音から開始するかたちに変更した。

第32小節目・第3拍目の内声部には、原曲には8分音符の $f$ 音が書かれているが、本稿の編曲ではこの $f$ 音は打鍵できないため省略して8分休符を置いた。

### 音の移動

次にあげた音は、原曲では1オクターブ下に書かれているが、指が届く高さへ移動した音である。

- ・第18小節目・第1拍目の右手、 $d^2$ 音
- ・第19小節目・第3拍目から第22小節目・第1拍目までの内声部、○印を付けた音
- ・第30小節目・第1拍目の内声部、 $g^1$ 音
- ・第43小節目から第44小節目の内声部、 $d^2-a^1-b^1-a^1-d^2-es^2-f^2-es^2$ 音
- ・第45小節目・第3拍目の内声部、 $d^2$ 音
- ・第49小節目・第1拍目の内声部、 $c^2$ 音
- ・第64小節目・第2拍目から3拍目の $fis^2-g^2$ 音、同4拍目から第65小節目・第1拍目の $d^2$ 音- $d^2$ 音
- ・第67小節目の右手○印を付けた音

### 長い拍にわたる音符の取り扱い

原曲で次の音に付けられていたタイを取り外した。

- ・第19小節目から第21小節目の上声部 $a^2$ 音
- ・第28小節目から第30小節目のバス $d$ 音
- ・第35小節目から第37小節目の内声部 $f^1$ 音
- ・第43小節目から第44小節目の上声部 $f^2$ 音

- ・第52小節目から第54小節目の内声部 $g^1$ 音(この $g^1$ 音は原曲の $g$ 音を1オクターブ高く移動したものである)
- ・第65小節目から第67小節目の内声部 $d^1$ 音(この $d^1$ 音については4分音符に書き直した)

## 4. おわりに

本稿では、鑑賞教材の「小フーガ ト短調」に焦点を当て、筆者の編曲を提示した。この編曲を作成するうえで最も注意を払った点は、できるだけ原曲のかたちを崩さずに、しかも2本の手と足で弾く曲をいかに2本の手だけで弾けるようにまとめるかということであった。演奏する対象としては教師を念頭に置いて検討をすすめてきたが、他方では生徒もこの対象とすることができる。現在はピアノを学ぶ生徒も多く、J.S.バッハの3声のインヴェンション(シンフォニア、BWV787-801)を弾く能力があれば、実際に弾かせてみることも意義があるといえる。ピアノ以外の名曲を受け身的に鑑賞するだけでなく、ピアノという身近な楽器で弾くことによって、表現する喜びを味わうことが可能となり、このことは器楽教育と融合させたより能動的な鑑賞教育として位置づけることができるのである。ただその場合、手の大きさや音楽的・技術的能力の個人差によっては、さらに音を簡略して弾きやすくしなければならない。

それはいろいろな箇所であらわれるが、いくつかを例にあげると、第19小節目・第2拍目の内声部において、 $f^1-e^1$ 音を原曲通りに弾くようにしたが、これらの音を1オクターブ上に移動して $f^2-e^2$ 音にする。

第28小節目から第30小節目のバスにおいて、D音とd音のオクターブを弾く際はソステヌートペダルを用いるのが望ましいが、もし演奏者の技術が未熟であったり、ピアノにこのペダルが付属していないような場合には、ソステヌートペダルを使わずに最低音のD音を省略して、d音だけで弾く。

第42小節目・第2拍目の内声部、後打音 $f^1-g^1$ 音を省略する。また、同小節・第4拍目の内声部 $es^1$ 音は右手で弾くようにしたが、手が小さい場合には1オクターブ上の $es^2$ 音で弾く、などである。

なお、今回はピアノ独奏用としたので原曲の忠実な再現という点ではいろいろな制約があったが、連弾や2台のピアノ用に編曲した場合には「オルガンらしさ」がより表現しやすくなると思われる。さらに加えて、アンサンブルという面からの教育についても期待できるが、これらの点については稿を改めて考察したい。また、今回の編曲は筆者のリサイクルで取りあげて、演奏による表現を行いたいと思う。

# Fugue

In G minor BWV578

J.S. Bach  
Transcribed by Hitoshi Shimahata

First system of musical notation for the Fugue in G minor, BWV 578. It shows the first two measures of the piece in G minor, 4/4 time. The right hand begins with a half note G4, followed by quarter notes A4, Bb4, and C5. The left hand is silent in the first two measures.

Second system of musical notation for the Fugue in G minor, BWV 578. It shows measures 3 and 4. Measure 3 contains a sixteenth-note triplet in the right hand. Measure 4 contains a sixteenth-note triplet in the right hand and a quarter note G4 in the left hand.

Third system of musical notation for the Fugue in G minor, BWV 578. It shows measures 5 and 6. Measure 5 contains a sixteenth-note triplet in the right hand. Measure 6 contains a sixteenth-note triplet in the right hand and a quarter note G4 in the left hand.

Fourth system of musical notation for the Fugue in G minor, BWV 578. It shows measures 7 and 8. Measure 7 contains a sixteenth-note triplet in the right hand. Measure 8 contains a sixteenth-note triplet in the right hand and a quarter note G4 in the left hand.

Fifth system of musical notation for the Fugue in G minor, BWV 578. It shows measures 9 and 10. Measure 9 contains a sixteenth-note triplet in the right hand. Measure 10 contains a sixteenth-note triplet in the right hand and a quarter note G4 in the left hand.

15

18

20

23

26

R. H.

28

Musical score for measures 28-30. The right hand features a complex melodic line with many sixteenth notes. The left hand provides a steady accompaniment with eighth notes. Four circled annotations are present in the bass clef: a circle around the first measure's bass line, a circle around the second measure's bass line, a circle around the third measure's bass line, and a circle around the fourth measure's bass line.

31

Musical score for measures 31-33. The right hand continues with a melodic line. The left hand has a more active role with eighth notes. A circled annotation is in the bass clef of the second measure. A larger oval annotation encompasses the bass clef of the third measure, highlighting a specific chordal structure.

34

Musical score for measures 34-35. The right hand has a melodic line with some rests. The left hand has a simple accompaniment of eighth notes.

36

Musical score for measures 36-38. The right hand features a dense texture of sixteenth notes. The left hand has a steady accompaniment of eighth notes.

39

Musical score for measures 39-41. The right hand has a melodic line. The left hand has a steady accompaniment. Four circled annotations are present in the bass clef, one in each measure, highlighting specific bass notes.



42

Musical notation for measures 42-43. The right hand features a complex melodic line with many sixteenth notes and some circled notes. The left hand has a steady bass line with circled notes.

44

Musical notation for measures 44-45. The right hand has a melodic line with some circled notes and a slur. The left hand continues with a bass line of circled notes.

46

Musical notation for measures 46-48. The right hand has a melodic line with slurs and some circled notes. The left hand has a bass line with some rests and circled notes.

49

Musical notation for measures 49-51. The right hand has a melodic line with slurs and some circled notes. The left hand has a bass line with some rests and circled notes.

52

Musical notation for measures 52-54. The right hand has a melodic line with slurs and some circled notes. The left hand has a bass line with some rests and circled notes.

Measures 55-57 of the Minuet in G minor, BWV 578. The score is in G minor (one flat) and 3/4 time. Measure 55 begins with a circled '55' in the bass clef. The right hand features a complex rhythmic pattern of eighth and sixteenth notes, while the left hand provides a steady accompaniment of eighth notes.

Measures 58-60. Measure 58 starts with a circled '58'. The right hand continues with intricate sixteenth-note passages, and the left hand maintains its accompaniment with some melodic movement.

Measures 61-63. Measure 61 is marked with a circled '61'. The right hand has a melodic line with some grace notes, and the left hand continues with eighth-note accompaniment.

Measures 64-65. Measure 64 is marked with a circled '64'. The right hand features a melodic line with grace notes, and the left hand continues with eighth-note accompaniment.

Measures 66-68. Measure 66 is marked with a circled '66'. The right hand has a melodic line with grace notes, and the left hand continues with eighth-note accompaniment. The piece concludes with a final cadence in measure 68.

**参考・引用資料****楽譜・文献**

- J.S.BACH : Orgelwerke IV, Edition Peters  
BACH : Orgelwerke Band 5, Bärenreiter  
BACH : Orgel Kompositionen für Klavier  
übertragen von Franz Liszt, Edition Peters  
J.S.BACH (高橋悠治編曲) : フーガ ト短調 BWV578,  
全音ピアノピース No.109, 全音楽譜出版社, 1974  
浜野政雄ほか 6 名著、中学校音楽科用教科書・新編中学生の音楽、音楽之友社、1994  
浜野政雄ほか 6 名著、中学校音楽科用教科書・新編中学生の器楽、音楽之友社、1993  
中等科音楽教育研究会編、中学校・高等学校教員養成課程用新版中等科音楽教育法、音楽之友社、1990

**C D**

- Nikolayeva plays BACH, Victor VDC-503  
J.S.BACH : Die Orgelmeisterwerke Helmuth Rilling, DENON 38C37-7039  
BACH : The Great Preludes & Fuges Vol. 2 ,  
米CBS MK42648

**楽譜作成ソフトウェア**

- 米PASSPORT社, Encore ver3.01 (Windows版)